

学習指導要領との関連から —— 「社会科」「総合的な学習」

学習指導要領の関連部分抜粋と本部の項目タイトル

社会科	目標	<p>(2) 社会的事象の特色や相互の関連，意味を考える力，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力，考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。</p> <p>(3) 社会的事象について，主体的に学習の問題を解決しようとする態度や，よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに，思考や理解を通して，地域社会に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚を養う。</p>
	内容	<p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(イ) 廃棄物を処理する事業は，衛生的な処理や資源の有効利用ができるよう進められていることや，生活環境の維持と向上に役立っていることを理解すること。</p> <p>イ 次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。</p> <p>(イ) 処理の仕組みや再利用，県内外の人々の協力などに着目して，廃棄物の処理のための事業の様子を捉え，その事業が果たす役割を考え，表現すること。</p>
総合的な学習	目標	<p>(1) 探究的な学習の過程において，課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け，課題に関わる概念を形成し，探究的な学習のよさを理解するようになる。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし，自分で課題を立て，情報を集め，整理・分析して，まとめ・表現することができるようになる。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに，互いのよさを生かしながら，積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>
項目タイトル		<ul style="list-style-type: none"> ● 学習内容(1) わが家の「ごみ」を調べてみよう P.6 ● 学習内容(2) スーパーマーケットでリサイクルを発見しよう P.7 ● 学習内容(3) ごみのリサイクル P.8 ● 学習内容(4) PETボトルのリサイクル P.9 ● 学習内容(5) 循環型社会を目指す「3つのR」..... P.10～11 ● 学習内容(6) ごみの量の「今」と「昔」 P.12 ● 学習内容(7) 私たちにできること① まちの美化 P.13 ● 学習内容(8) 私たちにできること② ごみを減らす P.14 ● 学校実践事例 児童が励む美化活動が行政や住民を動かし地域の連帯感を育む … P.15 ● 学校実践事例 児童運営のリサイクル活動でエコの輪が広がり自己肯定感向上 … P.16

わが家の「ごみ」を調べてみよう

ねらい

- 家庭ごみの量の多さを理解する。
- 家庭ごみの内訳を知る。
- 家庭での3Rの取り組みの大事さを理解する。

わが家はどれほどのごみを排出しているのでしょうか。循環型社会を作る取り組みは、まず家庭から行う必要があります。

一人が一日に出すごみは約900グラム！

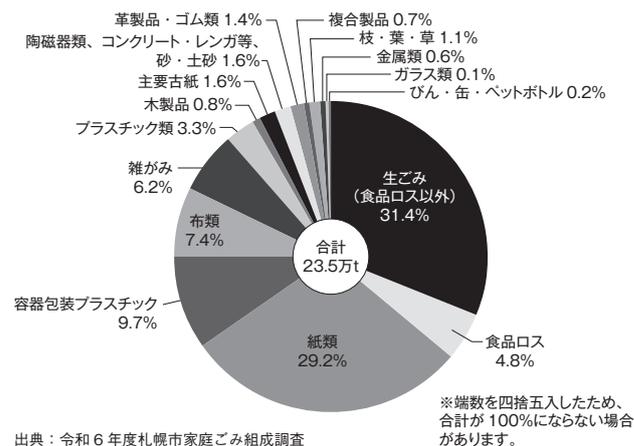
主として家庭から排出されるごみを「一般廃棄物」といいます。その量は年間で3,897万トン。これは東京ドーム約105杯分にあたります。そして、一人が一日に出すごみの量は平均で851グラム（ともに2023年度、P.10グラフ参照）。2000年度の1,185グラムに比べれば少なくなってきましたが、リデュース（出すごみの量を減らす）、リユース（繰り返し使う）、リサイクル（資源として生かす）の「3R」の努力と工夫が、それぞれの家庭や職場でもっと行われる必要があります。

大事なことはごみを出さないこと

家庭から「燃やせるごみ」として排出されるごみのなかで、もっとも多いのは生ごみで、ごみの約40%を占めています。そのなかには「調理くず」のほか「食べ残し」、ときには「まったく手をつけていないもの」（合わせて「食品ロス」とい

ます。）もあります。また、様々な製品や食品を包んでいた容器包装も大きな割合を占めています。

●家庭ごみのうち燃やせるごみの内訳（札幌市令和6年度）



家庭から出るごみのうち、食品トレーや牛乳パック、古紙などは、きちんと分別して資源回収に出すことで、リサイクルできます。

さらに、「3R」のなかでもっとも大事なことは、ごみを多く出さない生活を心がける「リデュース」です。例えばマイバッグを持参してレジ袋をもらわないようにする、食べ残しが出ないようにして生ごみを減らす、過剰な包装は断る、などの努力が必要です。「3R」に「リフューズ」（ごみになるものを断る）を加えて、「4R」という言い方をしている地域もあるようです。意識して心がけたいものです。（P.10、P.11参照）

調べ学習

●自分の家で1週間にどれだけのごみが出るか、記録してみましょう。

手順

燃やすごみ・プラスチックごみは重さで、びん、缶、PETボトル、古紙、食品トレーなどは個数で数えます。

展開

上のごみを、繰り返し使えるもの、資源としてリサイクルされるもの、ごみとして処分されるものに分類してみましょう。

スーパーマーケットでリサイクルを発見しよう

ねらい

- 身近なスーパーマーケットでリサイクルが実際に行われていることを知る。
- リサイクルのために、消費者の自覚が必要であることを理解する。

いつも買い物をしている近所のスーパーマーケット。そこでは身近なリサイクルを発見することができます。

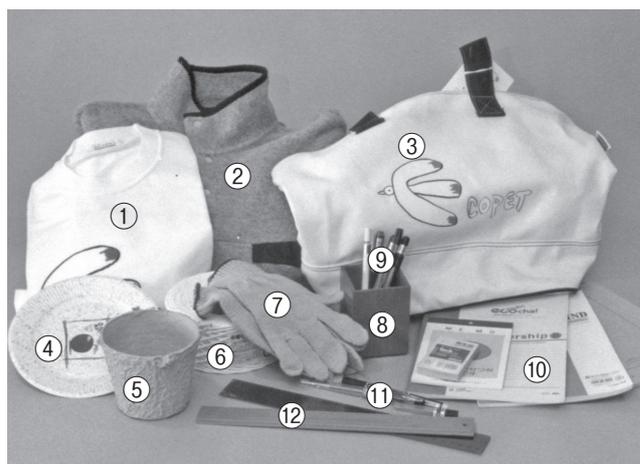
スーパーマーケットなどが行う「店頭回収」

食品トレー、紙パック、アルミ缶、PETボトルなどの回収ボックスをスーパーマーケットなどの店頭において、消費者が使い終わったものを持ち込めるようにすることを「店頭回収」といいます。回収品は、再生事業者が引き取り、プラスチック原料や化学原料、燃料として再利用されます。店頭回収には、電器店での電池の回収や酒店でのビールびんや一升びんの回収もあります。

店頭回収は、正しい分別が確実に行われる一方で、使った人が持ち込む前に紙パックを切り開くなどの手間がかかるため、回収率は高くありません。

「リサイクル商品」を探してみよう

回収された食品トレーは、再加工して再び食品トレーに生まれ変わります。PETボトルは再びPETボトルに加工されたり（ボトルtoボトル）、細かく砕いてPET樹脂にして服や卵パックなどに生まれ変わったりします。紙容器から再生利用されたティッシュペーパーやトイレトペーパーなどは、スーパーマーケットでも見ることができるので、探してみましょ。また家の中で、回収されたびんや缶から再生利用されたものがあるかどうか調べてみましょう。



①Tシャツ (PETボトル) ②フリース (PETボトル) ③トートバッグ (PETボトル) ④紙皿 (リンゴの搾りかす) ⑤育苗ポット (古紙) ⑥紙ひも (牛乳パック) ⑦軍手 (PETボトル) ⑧ペン立て (発泡トレー) ⑨蛍光ペン (再生樹脂) ⑩ノート、付箋 (古紙) ⑪ボールペン (再生樹脂) ⑫定規 (発泡スチロール)

調べ学習

●近所のスーパーマーケットで、どんなものを店頭回収しているか調べてみましょう。

手順

スーパーマーケットのリサイクルコーナーに行って、回収品目を確認します。

展開

区や市や町で回収していないものとの違いを見つけ、回収されたものは、どのようにリサイクルされているのか聞いてみましょう。

ごみのリサイクル

ねらい

- ごみの種類、分別法を理解し再利用について考え、家庭生活を工夫する。

ごみの排出をいかに抑えるかは資源の有効利用、最終処分場の確保の意味からも非常に大切なことです。ここでは、家庭のごみ、学校のごみのリサイクルについて考えてみましょう。

いろいろなごみのリサイクル

家や学校で出されるごみにはいろいろありますが、リサイクルできるごみには、次のようなものがあります。生ごみ、びん、アルミ缶、スチール缶、発泡スチロール、PETボトル、電池、紙、牛乳パック、布、電器製品などです。多くのものがリサイクルできますが、「分ければ資源、混ぜればごみ」です。分別を心がけましょう。

これらはそれぞれリサイクルの方法が異なります。(リサイクル別)

- アルミ缶…アルミ製造企業などのメーカーで新しいアルミ缶として再生されます。
アルミ缶のcan to can率は75.7%(2024年度)です。
- スチール缶…リサイクルセンターで磁石を使って他の金属などと選り分けられ、鉄骨などの土木資材や製缶メーカーで新しいスチール缶に生まれ変わります。
- 発泡スチロール…梱包材の発泡スチロールは選別され、ペレット化して成形加工をし、CDのケースやおもちゃなどに再利用されます。

- PETボトル…再商品化事業者により、細かく砕き(フレーク化)、ワイシャツなどのポリエチレン繊維製品やボールペン、洗剤ボトルなどに生まれ変わります。最近では、食品用ボトルとしての再生利用(ボトルtoボトル)も進められています。
- 牛乳パック…製紙メーカーによってティシュペーパー、トイレトペーパーなどに生まれ変わります。例えば牛乳パック6枚でトイレトペーパー1個分になります。

最終処分場の状況

高度成長期以降、一般廃棄物が大量に排出されるようになったため、これを埋め立てる「最終処分場」がひっ迫し、残余年数(埋立により処分場がいっぱいになるまでにかかる年数)が、1990年度では、全国平均で7.6年という状況となりました。

地域により、より短い残余年数のところもあり、そのため各市町村では、ごみの分別収集によって「3R」を促進し、埋め立てるごみの量を極力減らす努力をしてきました。たとえば名古屋市では1999年に「ごみ非常事態宣言」を出してごみの分別強化を進めた結果、2023年度には、ごみ処理量は約44%、埋立量は約94%削減できました。

こうした努力の結果、1999年度末に12.3年だった残余年数が、2023年度末には24.8年となっていますが、最終処分場の残余容量と数は概ね減少傾向にあり、引き続き努力が求められます。

調べ学習

- 家、学校で出るごみを調べ分類してみましょう。
資源ごみ、有害ごみ、可燃・不燃ごみ、粗大ごみに仕分けしてみましょう。

手順

グループに分かれて、学校から出るごみ、家庭から出るごみの担当を決め、どのような種類のごみが出るか書き出し、それらを分類します。

展開

分類したごみがどのように処理されているか調べてみましょう。

PETボトルのリサイクル

ねらい

- 分別の重要性を知る。
- 再生品の購入意識を持つ。
- 自分でできるリサイクルを実践する。

生活が豊かになり、様々な商品が手軽に買えるようになると、それにつれて容器の形態も多様になってきます。

ここではPETボトルについて考えてみましょう。

PETボトルの原料は ポリエチレンテレフタレート

PETボトルの原料はポリエチレンテレフタレートと呼ばれるプラスチック樹脂で、頭文字をとってPET（ペット）と呼ばれます。

ポリエチレンテレフタレートは、一般的には、石油から作るテレフタル酸とエチレングリコールを原料にして、高温・高真空下で化学反応させて作られた樹脂で、これを溶かして糸にすれば繊維、フィルムにしたものがビデオテープ、膨らませればPETボトルとなります。

最近では、植物由来の原料から作るバイオPETも温暖化対策の視点から注目されています。

PETボトルの用途と性質

1970年代にアメリカで使われ始めたPETボトルは、日本では1982年に登場しました。以来、その使用量は毎年増え続けています。

PETボトルがこれほどまでに利用される理由としては、その性質が挙げられます。PETボトルは軽くて

輸送・持ち運びに便利で、落としても割れない強度があり、衛生面でも安全で、現在のところ、飲料容器としては非常に優れた特性を持っています。また、缶や紙パックと違って、飲み残しても栓をすること（リキャップ）ができ、再度密閉できるので、携帯性に優れている点も、大きな特徴といえます。

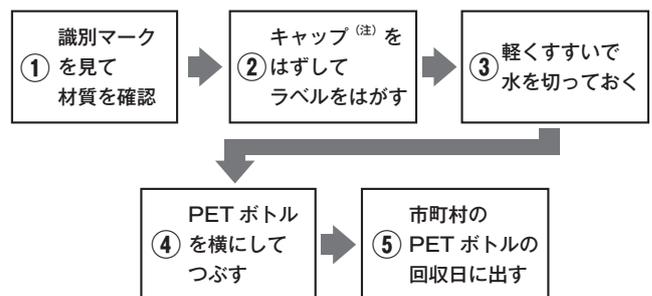
PETボトルの再生利用とごみ出し方法

PETボトルのリサイクルの一つに、回収されたPETボトルを材料として利用し、繊維やシートなどの製品に再生する「マテリアルリサイクル」があります。

このほか、食品用のPETボトルをリサイクルし、新たな食品用PETボトルに再利用する方法として、「ケミカルリサイクル（化学的に分解して、新たなPET樹脂を作る）」と「メカニカルリサイクル（高い洗浄力による異物の除去や高温下での除染などの物理的処理を経てペレット化する）」があります。

PETボトルのリサイクル率は、85.1%（2024年度）で、世界最高水準に達しています。

PETボトルをごみに出す時の処理法



注：キャップはボトル本体と原料が異なるため、「プラスチックごみ」として回収する自治体が多い。

調べ学習

●PETボトルはどのようにリサイクルされているか調べてみましょう。

手順

- ① 自分の家から出されるごみの中からPETボトルを分別します。
- ② PETボトルをごみに出す時の処理方法を調べます。
- ③ 回収日に自分で出してみます。

展開

PETボトルがどのような再生品になるかを調べ、有効利用について、その大切さを話し合ってみましょう。

循環型社会を目指す「3つのR」

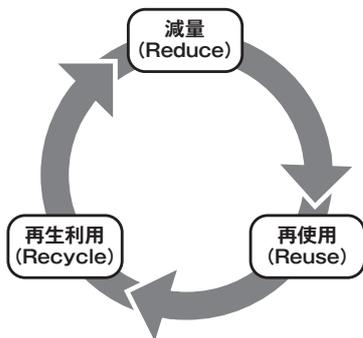
ねらい

- 資源の有効利用の大切さを理解する。
- 3Rを進める法律があることを知る。
- 消費者として取り組むことの大事さを理解する。

リデュース（減量）、リユース（再使用）、リサイクル（再生利用）の「3つのR」は、「循環型社会」実現の大切なキーワードです。

3Rとは

人々の暮らしが豊かになる一方、大量生産、大量消費によって大量の廃棄物が生み出されるようになり、ごみの処分場が不足したり資源が枯渇したりする心配も生じています。そのため、資源を浪費せずに再利用で循環させる「循環型社会」の実現が叫ばれるようになりました。物の生産、流通、消費からごみ処分までのすべてのサイクルで循環型社会実現を目指すためのキーワードが、リデュース(Reduce)、リユース(Reuse)、リサイクル(Recycle)の頭文字をとった「3R」です。



リデュース（ごみの量を減らそう）

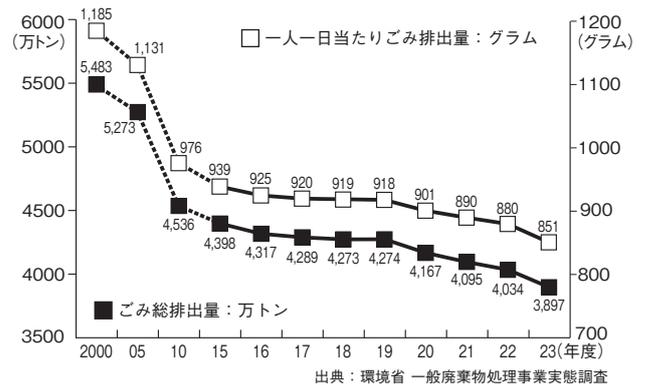
ごみをなるべく出さないこと。企業には、原材料を効率的に利用する製品作りなど、製品の設計、製造、流通過程においてごみの発生を抑えるための努力が求められています。

例えば、清涼飲料などの飲み物を作る会社では、飲

み物の容器の厚みを薄くするなど、容器の軽量化に努めています。消費者には、過剰な包装を断る、マイバッグを持参してスーパーマーケットの袋を減らす、詰め替え製品を使うなどの行動が求められます。家庭から出るごみの量は、3Rの様々な取り組みによって、2000年度をピークに減少し、2012年度以降微減傾向で推移しています。



●ごみ総排出量と一人一日当たりごみ排出量の推移



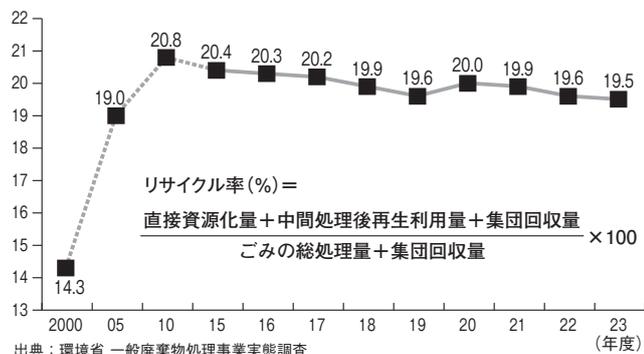
リユース（繰り返し使おう）

一度使ったものを、そのままの形でもう一度使うこと。生産者や販売者にとっては使用済みの製品や容器などを回収、洗浄、修理して再び使うことです。例えば、牛乳びんやビールびんなどのリターナブルびんは、回収後、洗浄して再び使用されています。消費者にとっては、使ったものを他のひとに譲る、バザーなどで売る、壊れたものをすぐに捨てず修理して使うことなどです。

リサイクル（資源として生かそう）

使用後の製品などを資源として再生利用すること。消費者が、市町村による分別収集（びん、缶、古紙など）やスーパーマーケット、コンビニエンスストアで行われる店頭回収（紙パックなど）で回収してもらうこ

●ごみのリサイクル率



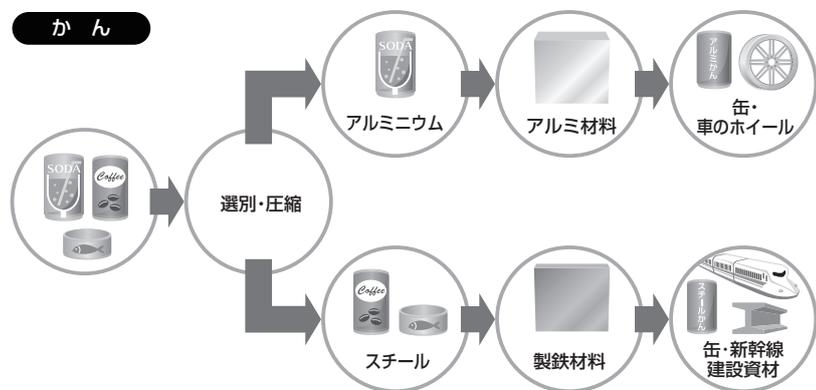
とで、資源として再生利用されます。例えば、古紙は再び紙の原料となるし、空き缶は鉄製品やアルミ製品の原料として用いられます。PETボトルを再生利用した新しいPETボトルやワイシャツなどのポリエチレン織

維製品、卵パック、洗剤ボトルなど、再生原料を使った様々な「リサイクル商品」も登場しています。

3Rを推し進める法律

資源の消費や環境への負荷が少ない「循環型社会」を作るために、2001年1月に「循環型社会形成推進基本法」が完全施行されました。同法は、再び利用できる廃棄物を「循環資源」と呼び、製品が廃棄物となる段階まで生産者が一定の責任を負う「拡大生産者責任」を明確にしました。リサイクル政策の基本方針を示す同法の下に、資源有効利用促進法が置かれ、さらに個別の分野について「容器包装リサイクル法」「家電リサイクル法」「食品リサイクル法」などが定められています。

また、海洋プラスチックごみ問題、気候変動問題等への対応を契機として、主として石油を原料としているプラスチックという素材に焦点を当て、プラスチックを使用する製品の設計から廃棄物となった際の処理に至るまでに関わるすべての主体による3Rの取り組みの促進を図る「プラスチック資源循環促進法」が制定され、2022年4月から施行されています。



調べ学習

自分の家で行っている資源回収を体験してみましょう。

手順

- ①自分の家でリサイクルに出しているものを調べます。
(品目、出し方、出す頻度と一回当たりの量)
- ②出している場所を調べます。
- ③次回の収集日に自分で出してみます。
- ④体験結果を持ち寄り、各家庭の違いを話し合ってみます。

展開

家族の協力を得て、家庭でリサイクルについて話し合う機会を持つのも一つの方法です。学校でも、ごみの出し方のルールについて話し合ってみましょう。また資源回収を通じて、ごみとどのように関わっていったらいいのか考えましょう。

ごみの量の「今」と「昔」

ねらい

- 大量消費の始まりによってごみが増えたことを理解する。
- ごみの排出量を減らすことが最も大事であることを理解する。

ごみが急増したのは1960年代の高度経済成長期から。大量消費が「ごみ問題」を生んだのです。

1960年代以降、ごみの排出量が急増

私たちの生活が、大量のごみを出すようになったのは、そう昔のことではありません。例えば、1955年の日本のごみの総排出量は621万トンでしたが、2000年には過去最高の5,483万トンにまで増加しました。

生活から出るごみが増えたのは、1960年代の高度経済成長期のことです。人々の生活が豊かになった一方で、ごみが急増。さらにプラスチックの登場など、ごみの種類も増え、処理に手間がかかるようになりました。市町村が分別回収を行うようになったのもこの

時期です。1970年には、ごみの処理についての基本の法律となる「廃棄物処理法」が作られ、ごみの回収や処理の方法が定められました。1975年には、静岡県沼津市が日本で初めて、紙、びん、缶などの「資源ごみ」としての回収を始めました。

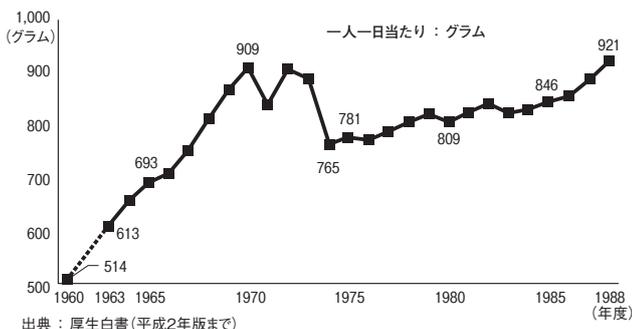
求められる「ごみを出さない生活」

1990年代後半以降は、資源の有効利用やごみの減量を求める法律が次々と作られたことで、分別回収やリサイクルなど、循環型社会を目指す取り組みが増え、市民の意識も高まってきました。

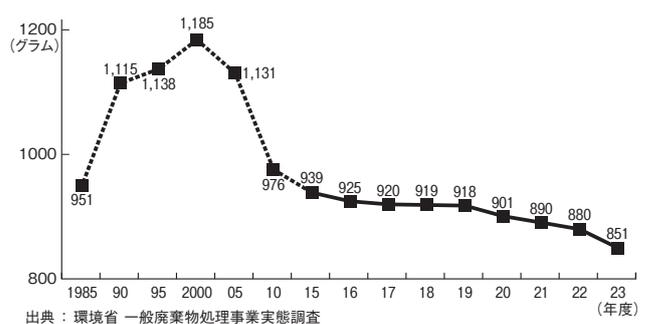
実際のごみ排出量の数値を見ても、2000年代以降、ごみの減量に取り組むことで、ごみ排出量を減らすことに成功していることが、下のグラフからも分かります。

ごみ問題の克服のために、暮らしのなかで「3R」を心がけること、とくに、ごみを少なくするライフスタイルが求められています。

●人の日常生活に伴って生ずるごみの排出量



●一人一日当たりごみの排出量：グラム



調べ学習

●身近なお年寄りに、昔の暮らしについて聞いてみましょう。

手順

- ①衣服、食事、家電製品など、生活に必要なものが、昔の暮らしのなかではどうだったのか、インタビューしてみます。
- ②昔の暮らしと現代の暮らしを比較する表を作ってみます。
- ③現代の暮らしのなかでごみを減らす方法を考えてみます。

私たちにできること① まちの美化

ねらい

- まちを美しくする行為について考える。
- まちの美化、清掃を誰が行っているのか考える。

まち美化は、行政だけでなく、様々な人々によって担われています。美化活動は、自分のまちに愛着をもつ「まちづくりの第一歩」です。

住民の自主的な参加が支える「まち美化」

まちの清掃、美化には多くの人が関わっています。市町村の清掃部署、清掃部署から委託された民間清掃会社、ボランティア団体、一斉清掃などの度に美化活動に参加するボランティア、自治会・町会、商業施設の持ち主、商店街組合、公園愛護会など多様です。



市民による清掃活動

道路や公園など公共空間の清掃は、行政とともに住民のボランティア活動によっても支えられています。最近では、住民がまちをわが子のように愛情をもって清掃する「アダプト・プログラム」(P.26参照)も全国に広がっています。

まち美化は「まちづくりの第一歩」

まち美化の大きな課題は「散乱ごみ」です。とくに、コンビニエンスストアや自動販売機で買った後、投げ捨てられた空き缶やビニール袋などは、自然に分解しないのでいつまでもまち中に散乱してしまいます。多くの自治体でポイ捨て禁止条例を制定しているほか、清涼飲料の業界団体も、自販機わきに使用済み容器をリサイクルするためのボックスを置くように取り決めるなどの対策を行っています。

まち美化は、誰もが参加できる活動です。自分の住むまちへの愛着を深めるためにも、積極的に「まち美化」に参加していきましょう。

コラム—自販機の環境配慮と災害対応

清涼飲料の自動販売機をめぐっては、周辺での空き缶などの散乱に加えて、消費電力量の問題も指摘されてきました。

しかし1990年代以降、省エネ対策が進められ、屋内自販機の24時間消灯、LED照明や省エネ型のヒートポンプ機の導入などの努力により、1台当たりの電気の年間消費量はかつての20%程度にまで抑えられるようになりました。さらに最近は、災害時に自販機を活用する取り組みが進み、災害時に自治体の緊急情報を電光掲示板に表示したり、無料で飲料を提供する機能をもったライフラインを担う自販機が増えています。

調べ学習

誰がまちを清掃しているのでしょうか。

手順

- ① 駅前、公園、通学路など、児童・生徒になじみのある場所を選び、「誰が」「どういう方法で」「どれくらいの頻度で」清掃を行っているのか調べてみましょう。市町村の担当部署（清掃や道路など）に聞いてまとめてみましょう。
- ② 可能であれば、実際に清掃を行っている人（市町村職員、住民、清掃会社など）に話を聞いてみましょう。

私たちにできること② ごみを減らす

ねらい

- よく考えて買い物をする意識を身に付ける。
- ごみの量を減らす工夫の大切さを理解する。

「3R」でもっとも大事な「リデュース」(ごみを減らす)。家庭ではどんな工夫が必要なのでしょう。

大事なことはごみを出さないこと

回収された分別ごみのうちには、資源として再利用できないものもあり、これらは、焼却され、その際、熱利用に努めるものの、最終的には埋め立てられることとなります。

焼却時には温室効果ガス(CO₂)が排出され、廃棄物処理に伴う温室効果ガス排出量は日本の総排出量の2.7%を占めています(2023年度[※])。また、最終処分場の数は概ね減少傾向にあります。そのため、「3R」の取り組みのなかでも家庭や職場で実践しやすい「リデュース」(ごみを減らす)が最も大切です。

※環境省 2025年4月25日プレス発表

よく考えて買い物をする

買い物のときはマイバッグを持参するほか、「衝動買い」「まとめ買い」をやめる、などの工夫をしましょう。

食品廃棄物のうち、まだ食べられるのに廃棄される食品、いわゆる食品ロス、464万トンにもなります(農林水産省及び環境省令和5年度推計)。世界中には、飢餓に苦しみ、食料援助を求めている人々もいます。(世界の食糧支援量年間約370万トン(2023年)) 食べ

物を買すぎず、作りすぎず、食べ残さないで、食べ物をごみにしない生活を心がけましょう。

まだ使えるものは修理して使う

壊れたものでも、自分で修理して使えないか調べましょう。例えば、服がほつれても、縫い直せば使えます。家電製品、靴、布団などは、まちのお店で修理してもらうことができます。また、要らなくなった服やもの、本は、リサイクルショップや古本屋などに持っていったり、フリーマーケットサービスを利用したりすることで、「リユース」(繰り返し使う)だけでなく「リデュース」(ごみの量を減らす)にも繋がります。

コラムー生ごみは工夫で減らせる

重量比で家庭から出るごみの約29%は生ごみです(容器包装廃棄物の使用・排出実態調査の概要(令和6年度))。ところが、この生ごみの約80%が水分と言われています。この水分を減らすだけで生ごみを大きく減らし、ごみ出しが楽になり、臭いも減ります。そのための方法は三つあります。

- ①水に濡らさない。野菜を洗うとき、使わない部分は先に切っておきましょう。また玉ねぎの皮のように乾いたものは、わざわざ水を含ませることのないよう、別に捨てましょう。
- ②よく絞る。調理くずなどは、よく絞って水を切ります。分別に出す前にもう一回絞りましょう。
- ③乾かす。匂いの気にならない季節であれば、新聞紙に包んで乾くまで置いて水分を飛ばすのもよいでしょう。

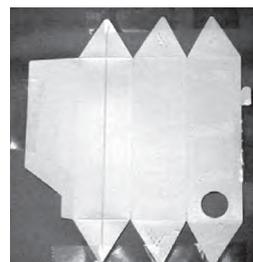
最近は電動式生ごみ処理機もあり、温風乾燥で水分を蒸発させたり(乾燥式)、微生物などの働きにより生ごみを分解し家庭菜園で使える堆肥にする(バイオ式)こともできるようになりました。

調べ学習

●容器包装を解体してみよう。

手順

- ①各家庭で買ったお菓子やおもちゃなどの容器包装を学校に持ち寄ります。
- ②持ち寄った容器包装を、右の写真のように解体して平面に広げます。
- ③解体した容器包装をパネルに張って標本にしてみます。
- ④どの商品にどれほどの容器包装が使われているか、その役割や必要性について話し合います。



児童が励む美化活動が行政や住民を 動かし地域の連帯感を育む

東京都 旧杉並区立杉並第八小学校

(環境美化教育優良校等表彰事業 第17回 文部科学大臣賞)

東京の夏の風物詩として知られる「東京高円寺阿波おどり」。年々規模が拡大する一方で、会場に散乱するごみ問題が深刻化していました（写真①）。

その解決に立ち上がったのが、同校6年生の児童たちです。祭り当日のごみ回収を呼びかける活動を2012年に開始して以来、毎年取り組みを深化させながら地域の輪を広げています。児童は祭りの2か月以上前から、地域団体や住民、行政の協力を得て様々な活動を展開。最初に、住民にごみの意識調査を実施（写真②）、その結果を祭りの主催団体へプレゼンし、活動のアドバイスをもらいます。

また、祭りとは無関係の壊れた家電などが捨てられる「便乗ごみ」問題（写真③）に目を向け、杉並区長や清掃事務所にごみの臨時回収協力を直接請願（写真④）。地域へも積極的に飛びこみ、手づくりのごみ削減啓発チラシを配り、町内会や商店街に掲示協力を募ります。祭り当日、児童は会場の観客に呼びかけながら資源ごみを回収（写真⑤）。

祭り終了後はごみの状況調査を行い、その結果をまとめて発表し、最後は5年生に引き継ぎます。ごみの問題を機に、児童はふるさとへの愛着を深めています。



【まち美化キッズ動画】 https://www.kankyobika.or.jp/kids/bm_suginami.html

児童運営のリサイクル活動で エコの輪が広がり自己肯定感向上

広島県福山市立春日小学校

(環境美化教育優良校等表彰事業 第18回 文部科学大臣賞)

市民の憩いの場所として親しまれている「春日池公園」が校区にある同校では、園内の清掃美化活動を始め、一斉下校時のポイ捨てごみ回収などに励んでいます（写真①）。

どのような散乱ごみが多いのかを分析する過程で、自分たちの地域環境の向上に注力するようになった児童は、「ふくやまエコトライアスロン」を考案。週に1回リサイクルの日と定め、アルミ缶やスチール缶などを回収する活動（写真②）で、市が取り組む環境配慮行動とリンクして進め、児童が宣伝や広告を楽しみながら行っているのが特徴です（写真③）。この仕組みをもっと知ってもらい、地域にエコの輪を広げたいという意欲が高まった児童は、地域文化祭で啓発活動を実施。ポスターやプラカードを作成し、リサイクルやごみの分別の大切さをアピールしています（写真④）。

さらに、近隣エリアの小学校や中学校にも発信し、児童会と生徒会の交流を通して取り組みを深めています（写真⑤）。

支援に力を尽くす住民や企業、行政に支えられながら環境学習を行い、社会に貢献する力を養っている児童は、大きな達成感とともに自己肯定感が向上しています。



【まち美化キッズ動画】 https://www.kankyobika.or.jp/kids/bm_kasugasyo.html